



ドアを開けると、コロニーの異観がとびこんできた。緑、ここは、植物が氾濫する世界なのだ。

今彼らがいる場所は、まだ円筒の中心軸に近いので、[緑の海]は眼下にあるように見える。やがて、3人はスロープを降り始めた。

まだこの位置では、乱雑なジャングル内の生物たちが出すであろう騒音は、聞こえてはこなかった。ただ、コロニー運転のための低い音が、意識すると伝わってくるだけだ。そして、彼ら自身の足音。

「この程度にあれば、重力は十分だな。ここは、1Gまで上がるんだろう？ 内面まで行けば」前を歩いているイハラが、言ったのだった。マサトは今デリケートな気持ちでいっぱい、なるべく会話などしたくないのだ。どんな突発事が起こるかわからないではないか。注意力を全開にしたい。

「そうですよ。それも本来の重力ですからね」

この建造物に使われているものは遠心力を利用した擬似重力ではないので、まったく通常の惑星上にいるのと同じ感覚ですごすことができるのだ。シェフィールドにより開発された[超密度物質]により、コロニーの外壁だけというわずかな厚みの物質で、通常の惑星上ほどの重力がえられるのだ。

スロープから円筒の内面に降りると、目前に乱雑な植物群が、頭上はるか高くまで茂っていた。こうして目にしなければ、誰が信じるだろう。この貴重な、多くの人口を収容すべく建造された宇宙空間コロニーが、このような荒れ放題の状態に置かれているとは。

「いったい、誰の仕業なんだ。いまましい。大仕事を作りやがって」

そう言って防護キャップを脱ぎ、額を隊員服の袖でぬぐったミノルは、しかし表情をがゆるんでいるようだ。マサトが言った。

「まったく、冒険好きの君には願ってもないことだよな。今回の仕事は、大当たりだ」

だがイハラは、真剣だった。彼は3人の中で最も年長であり、生物学者として、単なる調査員の2人よりはるかに格上だ。

「マサト、君だって似たようなものだろう。だがもっと締まらないと、とんだことになるぞ。いったい、何が飛び出すかわかりはしない。ここの開発者には、相当の生物学の権威がいたようだ」

「え、では、ただ荒れた植物群だけではなく、なにか危険な動物でも、この中に潜んでいると言うんですか？」

マサトは、自分は油断などしていないのにと不満が湧く間もなく、話に引き込まれていった。「しかしですよ。なんで危険な動物なんです？ なぜ彼らは、そんなものを造らねばならなかったんですか」

イハラは笑って、

「うん、まあ、そうと決まったわけでもない。が、そんな可能性も考慮しておかねばなるまい。なにしろ、この状態はひどい。それに、音信が途絶えていたんだから」

イハラが黙った。通話が入ったのだ。

「なんだ! これは、蜘蛛か? 蜘蛛の巣か。始末が悪いな」

調査の先発の者たちである。

「どうした。ミネ、君? 何があったんだ」

イハラが、通話機へどなった。3人とも立ち止まっていた。

「おそろしく大きな蜘蛛の巣だ。今、それにひっかかてしまった。これがなかなかしつこくて、動きがとれん」

「わかった。すぐ行く。あわてて行動するな。待っている」

イハラは通話を終わると、2人に合図し走り出した。

たちまち、樹木の元へ着いた。しかし、ひどく乱雑であった。

「これはちょっと、始末が悪いな。彼らは、この中へ突き進んで行ったのかな」

左へ少し移動したマサトが、叫んだ。

「ここです。植物をっ切り払った跡があります」

マサトは2人にかまわず、ジャングルの中にもぐりこんだ。先発の者たちが切り開いた跡をたどり始めたのだ。2人も、すぐ後に従った。

「ちえ、もっとよく切り払っておけばいいものを。自分たちは完全防護なので、強引に進めたんだろうが」

マサトは、マチェットを振りまわった。先発の二人は最高度の防護装備であったのに対し、彼ら3人はほとんど普通の隊員服のみである。身軽さを、重要視したのだ。なにしろ、先の2人が、危険を一手に引き受けてくれるはずだったから。たいして手を入れてない仮の通路は、彼らの進行を遅らせた。

再び、連絡が入った。

「うわ~、助けてくれ! 動けん。息ができ~」

「どうした。呼吸装置を使え。いったい、どうなったんだ」

イハラは通話しながら、マサトを押しよせようという勢いで進み始めた。

不安に耐え切れず、マサトは喘ぎながら言った。

「どうして息ができないんだろう。万一の場合、ワンタッチで呼吸装置を使用できるはずなのに」

「わからん。とにかく、見てみなければ、なんとも言えん」

後ろのミノルは、声がない。もくもくと進んでいるだけだ。

「おい、マサト、武器の準備はいいか。どんな状況かわからんぞ」

イハラが、最も元気だ。

「武器って、このマチェットじゃだめですか。たしか、蜘蛛って言ってませんでしたか。それなら」

前進を続けながらマサトは、超密度鋼製のマチェットを一振りして、腕ほどの太さの樹木を切り飛ばした。

「レールガンだ。すぐ撃てる状態にいるんだ。なにしろ、完全装備の彼らが助けを呼んでいるんだからな」

イハラは口調は厳しい。マサトは、左肩からスリングで吊ったレールガンを、右手に引き寄せた。全長7、80センチメートルのずんぐりした銃だ。マチェットは左手で使うしかない。

しばらく進むと、マサトがなにか叫び歩みを止めた。後ろの二人も急停止した。

「どうした。なんだ! あれは」

イハラが、マサトを押しつけて前へ出た。

そこにあるものが、蜘蛛の巣だと彼らが認識したのは、先発の者からの情報があったからである。でなければ、既存のものより桁外れに大きいその物体の正体に気づくのに時間がかかったろう。網の上端は頭上7、8メートルか。

空中の巣網の中心になにか白い物体がある。繭、そういうイメージを彼らが持ったのは、虫の世界をこの巣網並みに拡大して考えているからである。白く細長い物体。

「あれが、彼らの一人だということでしょうか。だとしたら、もう一人は?」

とマサトがあたりを見回すと、巣網の下のコロニーの床に同様のものがもう一つあった。

三人は、おそろおそろ巣へ近づいた。どうやら、巣の持ち主は姿を消しているようだ。

まず、下の[繭]から調べることにした。イハラは二人に周囲の監視を命じると、その物体をナイフで切り裂きはじめた。白い繊維様のものが、幾重にも重なっている。

まもなく、マサトが目を移すと、物体からはよほど白いものが除かれ、思った通り防護服らしい青色が見えていた。

「やはり、彼らなんですね。生きてはいないんでしょうね。死因は」

「馬鹿、注意を怠るな」

マサトはビクツとして、周囲へ視線を流した。

「すまん。だが、気をつけてくれ。防護服の彼らさえこの有様なんだから、われわれでは一たまりもない」

そう言いながらもイハラは作業の体勢を崩さない。

2人は、休まず監視を続けた。この付近は樹木がまばらで、ちょうどこの巨大な巣をかけるのに都合よくなっている。蜘蛛が自分で樹木を刈り払うのだろうか、などとマサトは考えた。

「なんだ、これは。軽い、おそろしく軽い」

イハラの叫びで、2人ともそちらを向いた。すでに、外皮はほとんど取り除かれ、防護服を着た人体が現れていた。

「軽って体がですか。彼はどちらです。ムロタ? それともミネですか」

イハラは、ヘルメットの中の顔を覗きこんだ。そして尻餅をついた。

「どうしたんです?」

ミノルがそばへ寄り、防護服の顔を見た。と、彼は飛び上がるように離れた。そして嘔吐を始めた。

「いや、マサト、見なくてもいいよ。この遺体は、ミイラだ。いや、ほとんど皮膚だけなのかもしれない」

軽すぎるという。彼は怪物に体細胞を溶かされてしまった。そして怪物は、そのジェリーをすべて吸い取ってしまったのだ、とイハラが言った。

イハラは立ち上がり、空中にあるものを見た。

「あれも、同じかな？」

言葉を失っていたマサトは、イハラを手伝って、蜘蛛の糸を手近なところからマチェットで切り始めた。糸は弾力があり、切りにくい。樹木にくっついている近くを切ると効果があった。

上の方は、近くにある細い樹木を切ったものへマチェットを結わえたもので処理した。

その遺体も、同様だった。防護服の中の人体は、まるで紙で作られたもののようで、皮膚が残されているのみだった。しかし、それを行ったと思われる怪物の姿は、依然として現れなかった。

。

「早く来てください。二人ともだめです。ひどい有様です。あとは、艇を使うしかありません」

マサトが連絡を終えると、イハラが遺体のそばから立ち上がった。

「君、あんまり怖がりすぎてもいけないよ」

組み打ちでは勝てないだろうが、離れて闘うなら、この銃で倒せるはずだ。問題は、敵が倒れるまで敵を寄せ付けずにいられるかだという。

「それですよ。どうなのでしょう。レールガンは、有効なのでしょうね。怪物の外皮を貫通できるでしょうか」

ただ怪物を痛がらせる程度なら、かえって危ない。かんかんに怒って、あっという間に獲物を捕らえてしまうだろう。

「おそらく、効果はあると思う。なんていっても、相手は生身だろう。レールガンの貫通力に勝てるとは思えない。そんな外皮はありえないだろう。これが、いくら貫通力を抑えてあるといってもね」

レールガンは、電磁力により弾丸を発射する原理の銃だが、現在彼らが所持しているものは、パワーを抑えてあった。なぜならコロニー内は閉じた世界であり、生命の綱の外壁に、自分たちの武器によって穴を開けてしまう危険があるからである。

「でも、なんで彼らは、こんなに簡単に餌食になってしまったんだろう。武器をちゃんと持っていたのに」

マサトは銃を拾い上げた。それは、殉職者持っていたレールガンだ。もう一挺は見えない。

「それは、彼らは何をする間もなく綱にかかってしまったからだろう。完全装備の彼らはかえって、闇雲にジャングルを突き進み、不覚にも罠にかかってしまったんだ。油断だ」

一度かかってしまうと、糸はしつこく、いくら強度のある服でも意味をなさなかったのだ。もがくほど、收拾がつかなくなったのだろう。

マサトは突然、あたりを見回した。いきなり、巨大な怪物が覆いかぶさってくるような気がしたのだ。

「そして、出現した巣の持ち主に、際限もなく糸を巻きつけられ[繭]に作り上げられてしまった。動けない彼らに、怪物は恐ろしい針を突き刺した。防護服にも弱い部分はあるからね」

「ところで、この巣の持ち主はどこへ行ってしまったのでしょうか。われわれに恐れをなしたのかな」

「どうかな。腹も十分ふくれたことだから、われわれに興味がなくなったのかもしれない」

「なんてことなんだ」

マサトは、残っている蜘蛛の糸を、長い柄のマチェットでむちゃくちゃにかき回した。

「どういうわけで、こんな怪物を造ったんだろう。趣味が悪いにもほどがある」

ジャングルを見渡せば、もっとどんな得体の知れないものが潜んでいるか、と恐ろしくなるマサトだった。この中をすべて調べねばならないとは、とんでもない仕事に出くわしたものだ。命がいくつあっても足りはしない。こんな蜘蛛、もっとも、まだその現物を見てはいないのだが、がうじゃうじゃ現れたらどうするのだ。いっそのこと、この膨大な植物群ごと焼くなりなんなりしてしまえばいいのだ。

「おお、やっと来たか。隊長たちだ」

イハラ視線を追うと、ジャングルの上に飛行艇のオレンジ色のボディが見えた。

「わかった。その樹木が疎らなところだな。なんとか、降りられるだろう」

飛行艇は、強引に降下してきた。邪魔になる樹木が押しつけられ、メリメリ折れる音がした。艇は、下部にある二基のファンで推力を得るのだが、ファンのカバーの格子が十分詰んでいるので支障はないようだ。

隊長のアオタと、巨躯を持つヌマが、艇から出てきた。

「なんだ、その巣というのは、めちゃめちゃにってしまったのか。形状は、とくに変わってはいなかったのだな」

そういいながらアオタは、横たわっている二体の防護服へ近づいた。

「なるほど、ひどいものだ。かわいそうなことをした」

ヌマもそばへ行き、遺体の顔をのぞき込んでいる。ヌマはすぐ離れたが、アオタは防護服を丹念に調べ始めた。すると、イハラもそばへ行き、何事か専門家同士の言葉を交わし始めた。

ヌマが、マサトたちのところへ来た。マサトは、心と気圧される気がした。巨体である。

「危なかったな。君たちでは、もっと簡単に始末されてしまったろう。どうだ、もう艇で宇宙船へ帰り、待機しては。あとは、俺に任せろ」

「防護服を着けていても、あの通りだ。だれでも大差あるまい」

もっとも君なら、皮膚が厚いから大丈夫かな。全身、顔のと同じくらいなら、十分だ、と言った。

「なに！」

ヌマはすごい形相をしたが、すぐなにを思ったか、ニヤリとした。そして、アオタの方へ入ってしまった。

「いやな奴だな。あの図体をしているくせに、隊長のご機嫌伺いが趣味ときているんだからな」

マサトは、ミノルに言うともなく呟いた。ミノルは2人の会話を聞いていなかったように、周囲を見回していた。怪物の出現を恐れているのだ。それが今、最も必要なことだった。相手が、どんなに素早く襲撃してくるかわからないのだから。

やがて、彼らは相談がまとまったらしく、遺体から離れ2人の方へ歩いてきた。

「2人を、艇で[入口区]へ運ぶことにする。それで、誰がそれに当たるかだが、イハラ君、やってくれるか。他にもう一人は、誰がいいかな」

何か考えていたらしいイハラは、ワンテンポ遅れて言った。

「いえ、それは、隊長にお願いします。遺体の詳しい調査ですから、私などより」

「そうか？ では、もう一人は」

アオタは満足気に、マサトとミノルを見比べた。一見呑気そうだが、底に狡猾さが感じられる顔だ。

「われわれも、今まで通りがいいです。ミノル、君はどうする」

ミノルは顔をくもらせたが、すぐ頷いて、

「私も、こちらにします」

ヌマはそれを聞くと、上機嫌で遺体の方へ歩き出した。アオタとイハラも、なにか話しながら、そちらへ向かった。

「悪かったな。でも隊長は、ヌマがご所望なんだぜ。あんな見え透いたゴマスリが」

マサトは、ミノルがここにいるのをひどく恐れているようなのに、今になって気づいた。かといって、もしミノルが艇の方を選ぶ意思表示をしていたら、たちまちヌマに、臆病者と言わぬばかりの攻撃を受けたろう。

アオタが、艇へ向かった。遺体収容のため、後部のドアを開けるのだろう。イハラとヌマが、一体を持ち上げた。マサトは振り向き、ミノルへ目配せすると残った遺体へ近づいた。

目を逸らし、肩のあたりを持ち上げた。軽い。ミノルも、足を持った。二人は、先の遺体が積み込まれるのを待った。

軽い遺体は、持ち続けても負担ではなかった。それよりマサトは、今何かに襲撃される危険に気づいた。やむをえず、遺体を放り出すことになるだろう。

馬鹿な。誰もガード役を付けることに気づいていないのだ。銃を相変わらず背負っているのは

、マサトだけではないか。皆、武器を付近へ放り出したままで、遺体の扱いに気をとられているのだ。アオタなどは、単なる一生物学者に過ぎないのだ。隊長の資格などない。

この事を注意すれば、ヌマがなにか皮肉を言うだろう。アオタも、気分を害し、なんらかの形でマサトに報復するかもしれない。誰が言うものか。自分を守ればいい。それからイハラも。ミノルにも恨みはない。ヌマだけは、積極的には助けなかつもりだ。この調査中、ずっとだ。

マサトとミノルが遺体を納めてくると、イハラが言っていた。

「大丈夫でしょう。われわれは、十分注意して行きますよ。防護服さえあれば」

「ああ、マサト。艇の中から防護服を出してくれ」

アオタが、振り返って言った。

艇内には、防護服が2着しかなかった。後ろへ来たミノルに言った。

「君は、艇で行くんだ。しかたないだろう。無防備ではだめだ」

。

服を抱え、2人が戻る。

「どうした。それだけか。まだ、あるんだろう」

マサトが、首を振る。

「2着しかありません。誰か、艇で行った方がいいでしょう?」

「うっかりしていた。誰が来る?」

「イハラさんに、来てもらったらどうです。他の者では」

ヌマだ。自分は何の役に立つというのだ。マサトは、ムツとした。

「君、来るか。残ったものたちはどうする。先へ進むか。危険ではないかな」

アオタは疑わしげに、マサトとミノルを見た。

「私は残ります。一人は生物学がわかる者がいた方がいいでしょう。またなにが現れるかわかりませんから」

イハラは身の危険など思いもしない。未知の生物に出合おうと、夢中なのだ。

「では、来る者は艇に乗れ。来なければ、出発する」

アオタは、焦れたように歩き出した。ヌマも、後を追う。振り返って、ニヤリとした。

「誰も、行かんのか? 1人は、防護服が足らんのだぞ」

「私は、いませんよ。気をつけていれば大丈夫でしょう」

そうイハラに答えたミノルを、マサトは見た。彼の気持ちがわからなかった。ミノルの場合、マサトほどヌマと馬が合わないことはあるまい。アオタの傍にるのが、気重なのか。まさか、あの遺体の近くにいるのが嫌だからではあるまい。

マサトは、イハラが防護服を着け始めたのを見て、自分も遠慮なく服へ手をかけた。そうしたら、あわててミノルが艇へ走るかとも思った。

しかしミノルは動かず、警笛を一つ鳴らして、艇は浮上した。

3人は、イハラを先頭にジャングルを進み始めた。無防備のミノルをかばい、マサトが後ろを歩いた。先頭に行くイハラは、樹木を切り開いて道を付けねばならないので、重労働だった。

しばらく行くと、マサトがイハラと位置を代わった。したたか茂った植物を切り払いながらマサトは、まさかミノルはこの労働避けるために防護服を着なかったのではないか、などと思った。

「ところで、この方向でいいんでしょうね。たしかに、[川]の方向は」

マサトは、声はずませていた。しかし、切れ味のいいマチェットを振り回すのは、喜びである。そう重くはない。ちょっと、剣に頼る冒険の主人公を連想してみる。未知の世界。膨大な植物群の中、1本の剣しか頼れるものはない。なにか得体の知れない生物が出現しようとも。

「馬鹿だなあ。あの雲の方向に進んでいけば、[川]があるに決まっているじゃないか。川は、内面を二分しているんだから、中心軸の雲は、いわば川と直角に交差しているわけだ。あれ、これは君が言ったんじゃないか」

マサトはうっかり、知りすぎていることをイハラに言われてしまったのだ。わかってはいても、この乱雑な植物群に飲み込まれてしまってみると、平常心を失ってしまうのだ。

冥王星の軌道上にあるこのコロニーは、ほぼ円筒形をしている。ここで、居住を予定されていたのは、円筒の内側面部であった。巨大な円盤である底面は、片方は、コロニー運転のための施設になっている。これが、[入口区]である。

もう一方は、コロニーの光源、いやエネルギー源である太陽光を取り入れる施設になっている。そこから巨大レンズを通して導入された光は、円筒の中心軸を直進する。むろん、中心軸は実体のあるものではない。中心軸にあたる空間には、特殊粒子が撒かれてあって、陽光を散乱させる。それが、下方である内面から見ると、輝く雲のように見えるのである。

[輝く雲]から、円筒の内側面全域に注がれている豊富な光が、この膨大な植物群に必要な、すべてのエネルギーをまかなっているのである。

なお、入口区側には、巨大な反射鏡があり、そこまで進んできた光は戻される。

「本当に、ここは異常な状態ですね。いまいましいのは、AI(人工知能)のやつですよ。あいつがしっかりしていれば、ここの状況はよくわかるはずなのに」

たとえどんな危険な生物が存在しているとしても、あらかじめわかっていたら、対応法も考えておける。

「それに、誰が、犯罪者というか、狂人というかわからないんだから。まさか、ここの開発員がすべて、共謀して、こんな事態を造ったというのではないでしょう。すべてではないにしても、多くの者たちが今どこかに隠れて、われわれの様子をうかがっているのでしょうか」

息を切らしながらしゃべるマサトに、苦笑しながらイハラは答えた。

「しかし、どうも人間はいそうな気配がないな。ただ、感じだけなんだが」

「だって、では彼らはどこへ行ってしまったというんです？ 連絡用の船は、発着場にありましたよ」

このコロニーの開発者たちを乗せてきたと思われる宇宙船は、入口区の外に係留されていた。

「とにかく、調べて回るしかない」

「彼らは襲ってくるのでしょうか。われわれを」

振り向いているマサトを、うながしながら、

「まず、そうなるだろう。彼らは明らかに、罪を犯したのだから。こんな貴重なコロニーを、気まぐれに遊びの場としたのだから」

マサトは刈り払い作業を再開した。

「これは、気まぐれに行ったことですか。これだけのことを」

「たしかにね。この植物群も、まだ詳しく見たわけではないが、並みの生物学者には造り出せまい。僕の直感からするとね、多数の者たちの共同の仕事というより、むしろ1人の天才の仕業という気がするんだ」

このこの樹木は、ほぼ2種類にわかれているという。複雑に入り乱れている蔓状のものと、それらに絡まれている宿主らしい太い幹を持った植物だ。

「根はどうなっているんですか。ここには、土はありませんから」

根によって、自体を支えることはできないわけだ。

「宿主の方は、どうやら元で皆つながっているようだな。一体になっているんだ。縦の方向だよ」

この場合のイハラの言う縦とは、今彼らが進んでいる方向のことである。横のつながりはないのか。

「水や養分も供給されなければならない。この向こうになにかがあるわけだ」

縦に一つながりになった宿主の植物に、前方でなにかがつながっているという。

「しかし、なにかありますよ。これは、根ではないんですか」

マサトが立ち止まって見ているのは、なにかぼうぼうとした細い繊維状のものである。それは、蔓植物の方から出ている。

「ああ、それは、おそらくね」

イハラは、上機嫌だ。ここは人工の世界であり、地面はない。足元は、すべてコロニーの床だ

。これでは、たとえば動物の排泄物、あるいは動植物の死骸などが、床の上に放置されたままになってしまう。そこで、それらを清掃するものが必要になる。

「これが、たとえば死体などを吸収してしまうんですか。どんなふうにです。体に触れれば体が溶けるんですか？」

とても、そんなふうには見えない。

「わからんが、ほかに別の機能もあるのかもしれない。たとえば、なにか溶解液を分泌するとかだ」

それには、対象物を廃棄・吸収していかどうか判断する機能も必要なわけだという。

「今は調べてもらえない。先へ急がねば」

イハラは仕事がいくらでもある、とうれしそうだ。興味深いものだけならいいが、危険なものばかりなら慎重な作業が要求され、大変な苦勞になる。

「やれやれ、無事に着いたな。とにかく、この開けたところなら、ジャングルの中よりましだろう」

三人は苦闘の末、目的の[川]へ出た。

川のこちら側と向こう側は、10メートルほどの幅で床面が露出していた。だが、川の両サイドになにもないわけではない。太い樹木の根が、ジャングルから出てそこを横断し、川へ入っ
ていっているのだ。2、30センチメートルの太さのものが、ほぼ5、6メートルの間隔で床に
並んでいる。水耕栽培だ。宿主の植物は縦に一体となり、この川へ根を伸ばし、水や養分を吸い
上げているのだ。

「なにか、いるでしょうか。まさか、あの蜘蛛が。いや水の中ではないか。あの怪物はどこへ行
ってしまったのか」

イハラは無言で、水中を覗き込んでいる。ミノルも川にそって歩いているが、興味というより
、危険があればできるだけ早くそれを発見しようという精神状態らしい。その証拠に、ビクッ
ビクッと周囲を見回している。

「ああ、この川は、全植物の生命を支えているのですね。ということは、この水中はとても動物
が棲める環境ではないわけですね」

この水には、植物の肥料となる各種物質が濃厚に含まれているのだろう。

「フン。一応そう言えるが、わからんぞ」

バイオテクノロジーの強者の手にかかったら、どんなことも可能になる。信じがたい環境にで
ても棲める生物を造り出すかもしれないという。

この異常な川は、見ていると目がくらむようだった。遠くへいくほどせり上がっていき、やが
て垂直な滝かと思われるように空中へ昇っていく。終わりは、左右に伸びている頭上の[輝く雲]で
途切れる。

しかし実際には、水流ははるか雲の向こう側にも、弧を描いて続いているのだ。そして再び、
背後へかけ下ってきている。

「すばらしい、空の水流ですね。この川に、なにか高速で泳ぐものを放ってみたいですね。する
とそれは、最高に加速した後、ゆるい角度で空中へ飛び出すかもしれない。そして、しばらく川
の上を滑空して、着水する」

この川という巨大な円周の、一点から一点への、いわば弦を飛行するわけだという。

イハラは、相手の言うことなど聞いていない。岸にそって、水中を見て歩いている。

「なにか、見えますか。動物はいないでしょう」

岸は、根が横断しているので、歩きにくい。走らねばならないのなら、障害物レースになる。

ミノルはと見ると、彼もあとをついてきていた。銃を抱え、ただちに発射できる態勢である。
無防備なので不安なのだろう。そう気づくと逆にマサトは、自分の着けている防護服が煩わし
くなくなった。ここにいるのなら、急に何かに襲われることもないので、脱いでもいいのではな
いか。

川と同じに、その両側のジャングルも弧を描いて空中へ昇っていっている。川のあるスペース
だけ、樹木が途切れている。ジャングルの断面が、川にそって続いているわけだ。

この植物の中を、しらみつぶしに調べねばならないのだろうか。マサトは呆然としてしまう
のだった。これら乱雑な植物群を造り出し、未知の怪物により2人の隊員をむごい姿に変えた生

物学者と思われる者。彼はいったいどこに隠れているのか。

「おい、ここではだめだ。高いところから、見るとしよう」

高いところ？ なにを言っているんだと思うと、イハラは樹木へ近づいていき木登りを始めた。どんどん登っていく。

マサトもその樹の下へいき、後を追った。この宿主の樹木は、川岸へきて最も太くなっている。太いが、曲がりくねっているし、また足ががりになる窪みもあるので登るには困らなかった。このような樹が、川にそって等間隔に並んでいる。

「なにか、見えますか。なるほど、ここなら全体が見えますね。魚はいないでしょう」

岸からでは、角度の関係で水中全体を見ることができないのだ。距離は離れてしまっても、ヘルメットのズームグラスがある。

イハラは川にそって、樹木から樹木へ移っていった。マサトも、その後を追った。樹木は、ほとんど自由な方向へ進めるほどの密度で繁茂していた。

「あれは？」

マサトはイハラに追いつき、その視線をたどり叫んだ。水中になにか物体が見えた。巨大だ。それはなにか生体だとすれば、動物ということになるのだろうか。うすい茶系統の色。形はよくわからない。

「なんですか。なにか生き物でしょうか？」

「うん」

イハラはマサトの言うことを、たいして意識に入れていない様子だ。邪魔をすべきではないと思い、会話をやめた。ゆっくり移動を続ける。

その物体は長いものらしく、水中を伸びている。いくつもあるのではなく、一体のもののような。形は、ところによりずいぶん異なっているらしい。

「おい、来てみたまえ」

ただ物体の有無ばかり見てすすんでいたマサトは、いつかイハラを追い抜いていた。彼は急いで戻り始めた。

イハラの見ているものは、すぐわかった。巨大な物体のそばに、2、3メートルの円形の物体があった。色は、青味のある灰色。

「なにか、生物がいたんですね。いやしかし、あんな丸いもの、動かないでしょう。植物ですか？」

「違う。あれじゃない。すぐそばの、小さなものだ」

えーっと思ってよく見ると、なるほど丸いもののそばに、20センチメートルかそこらの物体がある。形は良くわからないが、大きなものより色が濃い。

イハラは、それを凝視している。どうしてそれほど、と目を移して驚いた。

「あれ？ たしか、さっきは、あんなものは」

小さな方の物体に変化が起こったのだ。初め見たときは、形もよく認識しなかったが、今は目のようなものを具え、一方の端は尾を思わせる形になっている。

「きっと、発生が始まったんだ。いったい、どんな成体が出現するんだろう」

「発生が？ たしかさっきは、あんなものはありませんでしたよ。あれば気づかないはずはありません」

煩わしそうに、イハラが答えた。

「おそらく、あれが生み出したんだよ」

「え、あれって、あの巨大な物体がですか？ あれは、そういう働きをするものなんですか」

マサトが言ううちにも、それはみるみる形が変わっていった。複雑化していくのである。

「こんな生物がいるのでしょうか。第一、こんなに速く発生が進行するものですか？」

イハラは答えない。聞こえないのか。

サイズも、大きくなっている。初め20センチほどだったものが、すでに長さは1メートル近い。逆にそばの丸いものは、縮んで小さくなった。それは実は、今発生の進んでいるものに榮

養を与える器官だったのだ。二者を結ぶ管が、今ははっきりと見える。

なにか、たとえばサンショウウオの戯画といった代物だ。まだ完全には分化しておらず、部分部分は明確な生物体とはなっていない。

「あっ、尾が消える」

イハラが沈黙をやぶった。なるほど、ずっと目立っていた長い部分が。みるみる引っ込んでいく。

「尾のあるものではないとすると」

今ほぼ形を整えたらしい生物は、四肢を胴体に引きつけては伸ばすという動きを繰り返している。

その体は今は緑色に変わり、四肢を持っていた。頭部はのっぺりしていて、背に続いている。顔は、下向きなので見えない。

「巨大な、蛙じゃないかな」

マサトは口ではそう言ったが、人に近い気もする。背鰭が、尻の上まで続いている。下肢の先にも鰭がある。全体のサイズが増している。

平泳ぎのような動きを繰り返しているが、これはこの生物の本能的な動作なのか。

やがてそれは、向きを3人のいる岸の方へ変えた。そして泳ぎを繰り返し近づいてきた。

「ミノル! 注意しろ。怪物が岸へ上がる」

マサトが、通話機へ叫んだ。

下にいるミノルも、近づいてくる生物に気づいたらしい。銃をかまえている。

「さて、撃つな。どこかへ、隠れろ」

そう叫んだイハラは、すでにマサトより数メートル下へ降りていた。マサトも、あわてて降り始めた。怪物は、木に登るだろうか。手ごわく、逃げねばならなくなったとき、木の上は安全だろうかと考えた。

下へ降りたが、ミノルは見えなかった。マサトは急いで、イハラの後を追った。

イハラまで数メートルのところで、声をかけた。

「ミノルは、どうしたんです? 」

イハラは、振り向かず前進を続けた。

2人は、川にそって進んでいた。この辺りの樹木の密度はうすい。

「どうも怪物は、ミノルを追っているらしい」

隠れている彼の存在を知った怪物は、ミノルに近づいていった。しかたなく、ミノルが逃げる。さらに怪物はそれを追う、というわけだ。

「歩行も速いんですか。敵意を持っているんでしょうか」

「わからん。もう、ためらわず発砲することに決めよう。ミノルを撃たんように気をつけてくれ」

2人は急いだ。マチェットを放り出したままにしてきたので、邪魔物を切り払えず進みにくかった。しかしそれでも、刃物跡のある植物を見かけるので、ミノルが多少でもマチェットを使ったのである。

どう考えても、マサトは不思議だった。怪物はまだ、つい先ほど成体になったばかりだというのに、こうしてミノルを執拗に追いかける、などということができるのか。

「あれだ。油断するな」

イハラが、止まった。怪物も止まっている。

光を浴びた全身が、緑金に輝いている。筋肉が発達している。上体は、逆三角形だ。ちょっと、体格のいい人間が、濃緑のウェットスーツかなにかを着けているのか、と錯覚する。しかし、背鱗が首下から尻上まで続いている。身長は2メートルほど。

ミノルはと見ると、彼は怪物から5、6メートル離れ、こちらを向いている。手にはマチェットを握っている。

「銃だ。銃を使うんだ」

イハラの声で、ミノルははっとして背の銃へ手を伸ばした。

その隙だけで、怪物には十分だったのだ。一気にそれはミノルとの隔たりを越え、彼を攻撃した。恐ろしいジャンプ力だ。そして連続してジャンプすると、ミノルから離れ川岸へ出た。

「ミノルを見てください」

マサトは叫ぶと、怪物へ走った。樹木が邪魔だ。

岸へ出て、急停止した。距離を置かねば危険だ。

それが、振り向いた。見開いた黒い目。口は大きく、一文字に結んでいる。幅広の顔。鼻も耳も、存在は確かではない。顔も、頭から首まで一体の外皮だ。目と口以外は、全身が一体の緑の外皮に包まれている。

しかし、と思った。ミノルは瞬間的になにか攻撃を受けた。何らかの、体に具わった武器があるに違いない。それは、なにか。大きな口で噛み付いたのか。鋭利な、歯か牙があるかもしれない。それとも、と手先を見る。爪が長いようだ。指が何本かよくはわからない。爪で切り裂くのか。

「待て、殺すな。ミノルはたいしたことない」

マサトはビクツとして、イハラの方を見た。すると、水音がした。

すでに、怪物の姿はなかった。あわてて、水辺へ走った。

注意しながら、水中を覗いた。逃げたっ見せて、待ち構えているかもしれない。あの緑色の、目玉の顔がぬっと現れたら、と身震いした。

しかし、すでにどこにも鮮緑色を見出すことはなかった。イハラが、近づいてきた。

「まずかったか。逃げるとは思わなかった。君に飛び掛るとしても、一跳びにはできないと見たんで、ちょっと傷つけて捕らえる気だったんだ」

まあ、殺してもよかったんだな、と悔いている。

「でも、一瞬、人がなにかのスーツを着けているのかと迷いますよね」

「今度は、迷わず撃とう。安全が第一だ」

マサトはミノルのことに気づいた。

「彼は？ 大丈夫ですか」

「ああ、腕を切られた。首を狙ったのが、銃に伸ばした腕に当たったらしい。危なかったな。え、そうか。爪が長い」

しかしイハラは、あまり怪物に執心していないらしい。なにを考えているのだ。ミノルが近づいてきた。

「大丈夫か」

イハラが処置したらしく、右腕は袖を切り取られ、救急バンドをはめている。

「肝を冷やしたよ。あの巨大ガエルには」

青白い顔のミノルを見て、やはり艇で行けばよかったと思った。

通話を入れると、アオタはただちに來るということであつた。またヌマカ、とマサトは気が重くなった。

「隊長はもう、遺体などかまっていられないのだろう。未知の生物の出現だ。しかし、ミノルの言うその巨大ガエルは、どこへ行ってしまったのだろう。隠れる場所があるのだろうか」

水面を見渡していたイハラはやがて、決意した。

「中へもぐっていくしかないな。この装備なら、大丈夫だろう？」

防護服の首の後ろには、酸素のカートリッジが付いていて、ヘルメットのマスクをとじれば外界に関係なく呼吸できる。

「待ってください。これには、浮力に関する装備はありませんよ。急に上がらなければならない時、困りますよ」

川には、浅い所はない。水深は10メートルほどで、岸から60度くらいの角度のスロープが続いている。植物の根はそのスロープを降りて、分岐し川底に広がっている。

「この根を伝わって來るしかないか」

マサトは、水中でなにかに追われ岸へ上がろうともがく自分を想像した。

3人がいろいろ考えをめぐらしていると、飛行艇が、川の上の樹木が途切れた空間へ姿を現した。そして彼らの上へぐんぐん降りてきた。

艇は岸へ着陸せず、川の空間に下面が岸と面一の位置でホバリングしている。アオタが降りてきた。

イハラから話を聞くと、意気込んだ。

「それなら、艇からロープで降りればいい。誰が行く？」

水中の巨大物の調査である。マサトはそれを忘れていた。すっかりカエル男に気をとられていた。

「むろん、私ですよ。すぐ艇を岸へ上げてください」

マサトはイハラがそう言うだろうとは思ってはいたが、やはりホッとした。又マの操作するロープに、身を託す気にはなれなかった。気になっていたのだが、又マはなぜあんな位置に艇を置いているのだろう。ファンの加速する空気が、ものすごい勢いで水面をたたいている。激しいしぶきが上がっている。もし、水中のあの代物が巨大な生物だったら、一騒動持ち上がるところだ。

不意にあたりが暗くなった。

「なんだ! 」

アオタが叫び、みな頭上へ目を向けた。

「あれは? 」

マサトとイハラが同時に言った。

輝く雲を背景に、黒っぽい蛇体がのたうっていた。

「りゅう、あれは竜ですよ」

いちはやく、キャップ付属のズームグラスを操作したミノルが叫んだ。

「なに、竜とは、あの、東洋の架空の生物のことか? 馬鹿な」

アオタの声は、尻つぼみになった。

声をたてる者もなく、空中へ彼らの神経は集中された。

それは、移動すると、体色が青系統のものであることがわかってきた。誰かが精巧に竜を再現、いや生化学をもって、架空の生物を現実の存在にならしめたのである。

超怒級の装飾をもつ頭部。2本の鹿角。キラキラ光を反射して見えるものは、金色の目らしい。恐ろしいのは、巨大な顎だろう。

肢は、4本ある。その巨大な爪もまた恐ろしい破壊力をもつだろう。竜は今、無重力でもいくらかは必要な、移動や姿勢制御のための力を、体中央にある対の翼から得ている。それは蝙蝠のもののような形だ。

「問題は、あの翼の力だ。マサト、あれは、ここまで降りてきて再び浮かび上がるだけのパワーを発生できるだろうか。ここまで来ると、重力が強くて無理かな。それならいいんだが。奴も、二度とあそこまで帰れないような危険は冒すまいから」

マサトは考え込んだ。普通に考えて、あの体に対するあの翼のサイズでは無理だろう。しかし謎の製作者は、どんな異常パワーを発生する生体を作り出したかわからない。イハラこそ、専門家ではないか。

「さてよ。あんな空中に、あの巨体を維持するほどの餌があるわけがない。ということは、怪物はこのジャングルへ捕食に降りてくる、ということじゃないか。これは、えらいことだ。このあたりを自由の行動できるとしたら、お手上げじゃないか」

イハラの言葉に、アオタは表情を硬くして飛行艇へ向かった。そして振り返り、「では、先手を打とう。空中にいるうちに、倒すんだ。艇でなら、なんとか互角に戦えるだろう。歩兵になってからでは、太刀打ちできまい」

君たちも、奴が近づいたら一斉射撃できる準備をしてくれ。あの巨体だ、何発弾丸を必要とするかわからん。こう言い終えると、アオタは艇に入った。

マサトは、これでいいのかと不安がこみ上げてきた。

「大丈夫でしょうか。艇に勝ち目はあるでしょうか。レールガンは通用するんでしょうね」

イハラも心配そうに、艇の進行を見つめている。

「うん。あれだけの巨体の、しかも鱗におおわれた体となると、レールガンといえどもどうかな」

しかし弾丸がはね返されるということはないだろう。なんといっても生身だ。問題は、何発被弾したら戦闘不能になるかだ。やがては死に至るとしても、その以前にこちらが始末されてしまっては無意味だ。

飛行艇は、巨体の頭部の方へ進んで行った。近づくにつれて地上にいる者たちには、怪物の大きさが艇と比較されて改めて驚異の感が湧いた。艇の10倍以上の体長であった。

「あっ」

と誰からともなく、叫びが上がった。艇からレールガンが発射されたのだ。怪物の頭部が激しくのたうつのがわかった。

「だめだ。弾丸が貫通しない」

艇のアオタの嘆きである。

「多少の傷は負わせられるようだが、頭骨が相当強固らしい。これより、胴体部へ移る」

艇は、怒り狂う怪物から離れた。そして再び、怪物の体の中央へ向けて進んだ。

さらに激しく、蛇体がぐねった。弾丸は、長い胴体に満遍なく振りまかれているようだ。

「いいのでしょうか。攻撃がただあれを怒らせる程度なら、かえって困ることになりませんか」

マサトはひどく不安になり、イハラを見た。自分たちがとんでもないことをしているようではなかった。強大な力を持つものに対し、螻蛄の斧を振るっているのではないのかと。イハラは、黙って見つめているだけだ。答えられないか、あるいは聞こえていないのかもしれない。

が、まもなく

「おお、効いているぞ。明らかに、怪物は弱ってきているじゃないか」

たしかに誰の目にも、荒れ狂っていた巨体の動きが今は弱弱しいものに変化しているのがわかった。

「胴体の方が弱いんですね。レールガンは通用するんだ。よかった」

「胴体部には、内部を守る骨がないからね。鱗の強度では、レールガンに抗することができないんだ」

弾丸が巨体に、無数に食い込むかあるいは貫通しているのだと思うと、マサトは今度は痛々しいような気持ちが湧いてきた。奇跡的バイオテクノロジーの産物を、あられもない姿に変えてしまうことがひどく惜しまれた。イハラなど、もっとそうだろう。

またアオタにも同様の思いがあるのか、射撃が中断された。彼らは今、卓越したバイオテクノロジーの成果の最期を見届けようとしているのだ。

ところがしばらくすると、彼らの思いは急変化した。

「なんてことだ。あれは、よみがえったぞ」

「こんなことって、あるんですか」

マサトの言葉など聴いていないイハラは、1人でしゃべり始めた。

「回復してしまったのか。どのようにだ。いったい作者はどんな魔法を使ったんだ。まさかあれが、科学力を超えた神獣というわけでもあるまい」

一度は瀕死の状態とも見受けられた巨体に今、明らかに生気が見えていた。羽ばたきが、強力になったようだ。

「あっ」

と叫びが起こった。それは、飛行艇の通話からも発せられたようだ。

一瞬のできごとで、飛行艇の落下が始まった。怪物の尾の一打が、艇に振り下ろされたのであった。巨大な質量をもつその打撃に飛行艇は一たまりもなかった。

「どうした。しっかりしろ」

「隊長、大丈夫ですか。ヌマ」

下の者たちが、口々に叫んだ。しかし応えはなく、艇はぐんぐん落ちていた。

マサトは少し落ち着いてみると、艇の動力が完全には止まっていないことに気づいた。制御する人間の方のダメージが大きかったのだ。

怪物はと見ると、それはまだ追っては来ず、雲の付近に漂っている。

飛行艇は川へ落ち込まず、岸に降りていた。前部が川へ乗り出しているが、落ち込む心配はなかった。

着地の衝撃から、艇はなんとか逃れたようだ。それだけ、ファンによる浮力が残っていたのだろう。

しかし、竜による打撃は大きかった。それは、ほぼ艇の真上へ加えられたことがわかった。

「開きません。ゆがんでしまったらしい」

ドアを試すミノルを手で追い払い、マサトはレールガンを窓へ向けた。が思い直して、窓から覗いた。ヌマが、操縦席にうつ伏している。アオタはと捜すと、両側の席の間に倒れていた。

改めて、窓へ向けて銃を発射した。

ミノルが会釈すると、手際よくガラスを処理した。そして、そこから中へ潜り込んだ。ミノルは、怪我のことを忘れていた。

イハラがマサトを見た。

「どうする。やはりドアを開けねばなるまい」

そう、たとえば遺体の処理にしても。マサトはすでに、2人の死を認めてしまっている自分に気づいた。

「どうだ、大丈夫か？レーザートーチをくれ」

やはり、そう尋ねるべきなのだ。死んだと決まったわけではない。

「ドアを焼き切るんですか？使えなくしてしまっはまずいでしょう。切るのは、最小限にし

ましよう」

「頼む。うまくやってくれ」

イハラはマサトに道具を受け取らせるため、退いた。

「隊長は、だめだ。ヌマの方は息がある」

「なに！」

イハラがマサトを押し分け、窓に近づいた。そして、トーチを受け取りマサトに渡す間も惜しいように、窓へ潜り込んだ。

マサトはすぐトーチを使いながら、イハラもやはり2人ともだめだと思っていたのだと安心した。2人の死を早めに容認していた自分に、彼らの死を願望していた疑いを持ったのだった。しかし、誰もがそう思って当然な出来事だったのだ。

急にトーチを止め、上を見た。竜のことこそ肝心だった。が、ひとまず安心した。雲の付近にいる。あれが降りてきていたら、他の者の死などなんのことがある。

なんとかドアを開けると、イハラはヌマを背もたれを倒したシートに寝かせ、各種チェックをしている。アオタも隣に横たわっている。ミノルがマサトに、なにかを持ち上げる仕草をして見せた。

「隊長は、だめなんですか？」

一応、声をかけた。

「うん、全身打撲だ。しかしヌマは大丈夫だ。この体は伊達ではなかった。特に異常はないらしい。で、隊長だが、ここへは置けない。後ろの例のところへ移そう。どうやらこの発電能力は失われていないようだから、当分は置いておける」

「電気はあるんですか！」

そう言ってしまってからマサトは、あまりうれしそうに聞こえたのではと悔やんだ。アオタの遺体がここにあるのだ。

「では、少しでも早い方がいいですね」

ろくにアオタの顔も見ずにマサトは、足の方を持った。ミノルと2人で遺体を外に出し待っていると、イハラが後部にある格納庫のドアを開けた。

外でイハラが、上空を見上げていた。

「大丈夫ですか。降りてきたのでは？」

見上げると、変化はなかった。

「君は艇の状態を調べてくれ。なにもないんだろうな、艇には。あいつに対抗できる武器なんて」

飛行艇内に入り又マを見ると、眠っているらしかった。当てもなくチェックを始めた。艇の機能が万全でも、あれには歯が立たないのだ。いったい、どうしたらいいのだ。

イハラが入ってきて、又マの様子を見た。すぐマサトのところへ来た。

「これはもう、飛べないんだろう？あいつを倒せないんなら、逃げるしかない。この内面から脱出できればなあ」

「ミノルが見張っているんですね。部品がなければ無理です。電気だけは十分使えるんですが」

2人は外へ出た。ミノルが寄ってきた。

「又マは、どうです」

「異常はないが、休ませておこう。竜が降りてきたとしても、艇内の方が安全だ。外に我々がいれば、こっちへ注意が向くからね」

「あれは、降りてくるんですね。来ないということは、ありえないんですね」

ミノルが、生気のない顔を上へ向ける。マサトはそれを見て、なにか自分がしなければと熱いものが湧いてきた。しかし、なにがある。アオタが死んだ。ひそかに無能扱いしてきたアオタが。もう彼のせいにはできない。自分しかない。生きるには、自分の能力しか頼れないのだ。なにか。

マサトは心臓が飛び出すかと思った。ついに、それが来る。怪物は、矮小な人間たちを見出す視力を具えているのだろうか。

「来ます。どうします」

マサトの声はかすれた。

「ジャングルだ！駆け込め」

3人は急いだ。

「来た！」

イハラが叫んだ時あたりが暗くなり、みな床へ倒れた。大量の空気が移動して行った。

見ると、蛇体は川にそって、はるか上空へ昇ってゆくところだった。まもなく、その姿は雲に隠れた。

3人は立ち上がった。が、叫んだミノルの指差す方向を見ると、雲の反対側から竜の姿が現れ

ていた。

「あ、来ますよ。今度こそ、降りてくるかもしれない。どうする」

マサトは、イハラに突き飛ばされた。そして樹木の中へ転がり込んだ。また膨大な空気が移動していった。

「すみません。あのままだったら、さらわれていたでしょうか。あぶなかった」

「だめだよ。生死の境目だぜ。気を張り詰めていなければ」

3人は、樹木の中から上空を見上げていた。

「なにか、降りてこない理由があるのだろうか。いや、来るものと思っていた方がいい。少しでも奥へ進んでおくしかない。あ、又マは、彼をどうしたものかな」

艇へ通話を入れた。が応答がない。

「まだ眠っているらしい。竜はどうするだろうか。我々の行動は知っているし、こっちへ関心は向いているのだから、艇は大丈夫だろう」

竜は、艇に生存者がいるのを知る能力があるのだろうか。

「我々を放っておくようなら、艇にもどろう。又マに目標を変えたのなら」

イハラとマサトが交代で樹木を切り払いながら、すこしでも奥へと進み始めた。

「どうします。どうもあいつは追って来ないようじゃないですか」

マサトが立ち止まったのを機会に、3人とも腰を下ろした。

「最優先でなすべきことはなにか。完全に危険から逃れるには、入口区へ行くしかない。竜もあそこまでは来られまいから。このまま円筒の端へ向かうだけだ」

「飛行艇ですが、2、3の部品があればなんとか飛ばせられるかもしれません。そうなれば、遺体も運べますね」

イハラは顔を輝かせた。

「そうか。艇は修理可能なのか。あれさえあれば、こんな苦労はしなくて済む」

「ただボディが大きくゆがんでしまったので、気密を保つことはできません」

この大気に不安はない。飛行艇で水にもぐることもないだろう。

しかし、もうマサトは顔をくもらせている。

「どうした？」

「だって、あれが飛び立ったらまた竜が来るんじゃないですか。これでは、直してもなんにもなりませんよ」

イハラは考えたが、

「とにかく、入口区へ帰ろう。宇宙船になにかないか、見てみるんだ」

マサトは疑問の表情だ。

「ほかに方法はない。えーと、又マはどうかな。まだだめなら、ちょっと」

又マは復活していた。

「だから、君は待っていてくれ。じゃあ、我々は行く」

入口区の外にある係留場の宇宙船まで行ってしまえば、本部へ連絡できる。そうすれば、この障害の大きさを訴えることができる。ここの船の装備で不十分だとなれば、なにか届けさせたり、十分な応援を来させることができるだろう。ここの状態は、十分な出費をさせるほど彼らを驚かすはずだ。

やがて彼らは、来るとき切り開いた仮の通路に出た。手を入れてあるここは、今まで通ってきたところと格段の差があった。とはいえ、植物はけして刈り払われたままではない。成長・再生をおこたりなく続けているらしく、切り裂かれたままの部分を見出すことはないのだ。わずかの日数で、この通路も他の部分と見分けがつかなくなってしまうのだろう。

いつの間にか、ミノルが先頭になっていた。仮の通路は、並装の彼でも支障ないのだ。あるいは、後方への恐れもあるのかもしれない。しかし、竜とまでいかななくてもなにか別の怪物が彼らを追ってきているとしたら、防護服でも安心できないかもしれない。どんなものが登場するかわからない。マサトは急に後ろに不安を持ち始めた。後ろのイハラが、いつの間にか姿を消していたら。

「うっ、ぐっ」

後ろに気を取られていたマサトは、ミノルの呻きに驚いた。

緑色の人影が、樹木の中へ飛びこむところだった。銃を発射した。トリガーを引いたまま敵に合わせて銃を動かす。

手ごたえを感じたが、すぐミノルへ思いが走った。彼が視界になかったことに。ミノルは倒れていた。イハラもそばへ来た。

「どうだ、大丈夫か？カエル男だったんだな。ほんとに油断ができないな」

黙っているマサトに不審を持ち、イハラも倒れているミノルに近寄った。

「これは！ひどい。あれには、こんな能力があったのか」

マサトもカエル男の恐ろしい技に肝を冷やしていたのだ。ミノルのく顎は皮一枚でつながって

いた。一瞬の早業に、彼は叫びを上げる間もなかったのだ。

「で、君は、あいつを撃ったんだね？」

イハラは敵の姿をさがす。

「手ごたえは、あったのかい」

マサトもイハラの後を追った。

「たしかに、当たったと思います」

マサトは言った。あれの外皮はそれほど強固なものではあるまい。せめて、ミノルの仇を討てたと思う。

イハラはマチェットを使いながら、樹木の中へ入っていく。マサトはしだいに、弾が当たらなかったのではと思えてきた。カエル男はあれほどのジャンプ力がありながら、このように乱雑な中へ潜り込む能力もあるのだろうか。はなはだ融通の利く体だ。しかし死体とは言わないまでも、怪我をした体をそのへんに横たえていてもよさそうなものだ。

「当たらなかったんでしょうか。すばしこいやつだな」

「傷は負っているらしよ。血を流している。あれはかなりの耐久力をもっているのだろう。あるいは、痛覚などは弱く造られていて、死の直前まで能力いっぱいに行動できるのかもしれない」

普通の生物と同じに思っているはいけない。完全に死んだことを確認するまで、気を緩めるべきではない。

「いや、今はあれを追うのをよそう。前進するんだ。ミノルはどうしたものかな」

頭部がもげそうで、大量出血している遺体を扱うのは困難であった。

「やむを得ないな。置いていく他はあるまい」

マサトはうなずいた。ミノルの体は、無事の残っているだろうか。なにかに食い荒らされてしまうのではないか。しかし、自分の方も船にたどり着けるかどうか、と思うと迷いは消えた。「あせって急ぐばかりでは、危ない。十分注意して進もう。このジャングルの中で、まだなにが襲ってくるかわからない」

しかし、それより竜だと思う。頭上を見たが、植物がはびこっていて上空は見えない。ジャングルの中は光量が乏しい。

ついに、2人は樹木から抜け出した。この位置では、すでに雲は頭上にはない。真上には、反射鏡の支持部がきている。

2人はすぐ、入口区へ向かい斜面を登り始めた。

「やれやれ、これでやっと文明圏へ帰れる。船に着いたら、少しゆっくりしましょう。精神的にも疲れましたよ」

イハラもうなずいた。あせっても仕方ないなという。すると今度は、本部への報告が気重になる。

そのとき、なにかを感じて2人は後方を見た。巨体が近づいてくるところだった。

「どうします、どっちへ？」

入口区のドアまでは、まだ2、30メートルはある。

「だめだ、戻るんだ。ジャングルへもぐるんだ」

(どうして?) と思いながらもマサトは、イハラの後をジャングルへ向かった。

マサトがジャングルの仮通路に達したとき、頭上で空気が大きく移動するのを感じた。

「ぎりぎりだったな」

見上げると、長い体が今、頭部を上にして一瞬垂直になった。尾はスロープすれすれだ。ターンしようとしているのだった。

2人は急いで樹木の中へもぐった。怪物が今にもスロープを這い降り、ジャングルの中へ入ってくるのではと生きた心地がしなかった。少しでも中へと進む。

だが、相変わらず竜は空中にいるらしい。ただこれまでより低空にいるらしく、不気味な羽音が、周期的に近くなったり遠くなったりして聞こえている。

「あいつは、下へは降りられないんでしょうか。そうなら、少なくともここにいれば安全ですね」

「だが、それでは、なにを食糧としているんだ」

イハラはいらだっている。マサトにしてみれば、取りあえず安全なら大きな喜びなのだが。イハラの得たいものは、安全よりも疑問の回答なのだ。

「動きがとれんじゃないか。入口区へ行けねば、本部への連絡もできない。ただここで、怪物を恐れて時をつぶしているしかできない」

「食糧は、なんとか得られそうですがね」

イハラは怒ったような顔をしたが、すぐ表情をゆるめ樹木に実っている果実へ目を向けた。

2人は空腹に気づき携帯食を取り出した。バックパックには5回分の食糧が納まっていたが、

2回分お消費していた。ミノルのバックパックを放置してきたが、ここにある果実が利用できるならあれを当てにしなくて良い。ここの果実、ジャングル全体では莫大な量だろう。食物となるか？

「その果実類は、食べられるんでしょう？」

チョコレート状の完全栄養食を食べながら、マサトが尋ねた。赤や黄のものが、蔓植物に成っている。

「うん。まず食用を目的としていると思われる。ちょっとチェックすればわかる」

イハラは多少億劫といった様子で立ち上がった。マサトには最も重要な仕事に思われるのだが。どれだけここで過ごさねばならないか、わからないのだから。

イハラは腰のベルトのポーチから、検査用の機器を取り、蔓状の植物へ手をかけた。果実はほとんどのものが、背丈より高い位置にあった。果実へたどりつき、彼は試験針を突き刺した。そしてうなずくと、ナイフを取り2つに切断した。口へもっていく。

やがて満足した表情になり、黄色のものを1つもぎ取りマサトに放ってよこした。

果実は、10センチ大のすべすべした表皮のものだった。ナイフで2つにした。果肉はオレンジ色だった。皮は簡単にむける。酸味のある、さくさくとしたものだった。種子のようなものはなかった。

食べ終わるのを待っていたイハラは、今度は赤いものを投げた。これは、ラグビーボール状のものだった。長さは15センチ。

「そうじゃない。穴をあけるんだ」

なるほど、これは中身が液状になっているらしく、ゆすると音がする。ナイフを突き刺す。上に上げ、液を口で受けた。さわやかな甘さの汁だった。

「栄養も十分だよ。君はこのジャングルで暮らしてゆける。あの竜も、君をここの住人として認めてくれるのかな。ここで猿類の1匹として生きればだ。どうする？」

イハラはニヤリとした。

「君にまかせるよ。なにか考えてくれ、ここから脱出する方法を。あの怪物を倒す手段はありえないだろうか。ないだろうな」

2人はあてもなく、通路を川へ向かって歩き始めた。この樹木の中から出ることは、竜がいる限り不可能だ。いやここにいれば安全というわけでもない。敵は竜だけではない。カエル男は深手を負って逃げたが、思いがけない回復力を持っているかもしれない。それどころか、もう1個体生まれてこないとどうして言える。こう思うと、カエル男が休みなく放出され次々とこのジャングルへ入り込んでくるような気がして、マサトは不安にあえいだ。

「あの、川の物体はなんでしょう？カエル男は、たしかにあれから生まれたんですか。すると、何人も生み出されてくる可能性があるわけでしょう」

イハラが立ち止まった。顔が曇っている。端正な色黒の顔。

「そうなんだ。まあカエル男なら、数人なら大丈夫だろう。この装備ならね」

ミノルは、あまりに軽装備だったのだ。あの惨殺はショックだった。

「僕はね、あの物体の潜在能力が恐ろしいんだよ」

「潜在能力、どんな？」

「あれはね、とにかくカエル男の胚を放出したからには、生物を造り出す能力があるんだよ」

DNAを合成して、生物の発生の元となる通常なら受精卵に当たるものを造り出すのだという。

「あの巨大な物体全体が、そのはたらきをしているんですか。あれ自体、1つの生物のようなはたらきはしないんですか」

あれが、動物のように、行動し捕食することはないのか。

「それは、わからん。しかし、あれ自体は動かないんじゃないだろうか」

あまりに巨大で、川底にどっしりと落ちてしまっている。通常の生命のいとなみではない。人工的に造り上げた、しかも思うとおりの生物を生み出す装置となると、あれぐらいの大きさは必要なだろう。

「むろん、あれ自体生きてゆくための臓器をもっているわけだろうし栄養の摂取・老廃物の排出が必要だ」

イハラは立ち止まってしまった。マサトは不安になった。イハラの興奮ぶりにだ。しかし今、危機を乗り越えるには、専門家の彼の能力を最大限に発揮させなければならないのだ。彼の言うことが難解な内容であってもなんとか消化し、できることなら素人のマサトの方からアイデアを出さねばならないのだ。

「僕が疑問に思うのは、いったいどのように、創り主があれに指令を与えるのかということだ」

創り主は自分の望む生物を創らせるにあたって、こんなものをこう創れ、とどんな方法であの代物に命じることができるのだろうか。

「あれは、言葉を解するんですよ。すいません。冗談ですよ。しかし、絶対そんなことはないとも言えないでしょう」

「それは、そうだが」

水中にもぐって行って、どこかにあるあの代物の耳へ向かって話しかけるのか。そうではないとも言えないか。イハラは考え込んでいる。

「簡単です。あれは、カエル男専用なんです。ほかのものは創れない。ところで、あれ自体、生体なのは確かですか」

「それは間違いないだろう」

もっとも、あの中には金属のロボットが何台も入っていて、各種化学装置を使ってDNA操作を行い未知の生物の胚を創っているかもしれない。その生化学工場を、あの生体を思わせるカバーですっぽり包んであるのだ。

「ええー。まさか」

マサトは初め相手が本気で言っているのだと思った。

「では、あの物体はどうやって自身の栄養補給を行っているんです。なにかを創るにしても、材料がなければ」

「わからん。水中に魚でも多くいれば、大口を開けているだけで勝手に飛び込んでくるだろうけど。魚の姿も見ないし」

「あっ、ひょっとしてあれはここの植物のように、水に溶けている物質を利用できるんじゃないありませんか。植物的機能をもっているんです」

「なるほど、なかなか柔軟な思考をするね。では植物は光合成をするが、あの物体もそうだろうか」